

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：31501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320162

研究課題名(和文) 完新世の気候変動と縄紋文化の変化

研究課題名(英文) Holocene Climate Changes and Jomon Cultural Changes

研究代表者

安齋 正人(安齋正人)(Anzai, Masahito)

東北芸術工科大学・付置研究所・教授

研究者番号：60114360

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,000,000円、(間接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：数度にわたる完新世の気候寒冷化とその後の急激な回復(ボンド・イベント：約8200年前、約5800年前、約4300年前、約2800年前のピーク)と、縄紋土器の放射性炭素(^{14}C)年代測定値の暦年較正年代とを対比させた結果、それぞれの気候変動が、草創期の終末/早期の初頭、早期後葉/前期初頭、前期後葉/中期初頭、中期後葉/後期初頭、晩期後葉/弥生初頭に対応することがわかった。とくに約8200年前のピークである8.2kaイベントの影響は、定住・集住集落の解体と遊動化、そして再定住化という居住パターンの変化として、列島各地の考古資料に明瞭に記録されている。

研究成果の概要(英文)：Comparing the peaks of climate fluctuations throughout the Holocene, for example, Bond events (8.2 ka, 5.8 ka, 4.3 ka, 2.8 ka), to calibrated radiocarbon dates of Jomon pottery indicates that each climatic change occurred during four archaeological phases: the final period of Incipient Jomon to Early Initial Jomon; Late Initial Jomon to Early Middle Jomon; Late Middle Jomon to Early Late Jomon; and Late Final Jomon to Early Yayoi. In particular, the influence of the 8.2 ka event was recorded in archaeological material from various areas in the Japanese archipelago and is reflected in the chronological order of settlement patterns: (1) disintegration of sedentary settlements; (2) nomadism; and (3) readaptation to sedentism.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：縄紋文化 気候変動 生態系史 東北地方 東北アジア 日本列島

1. 研究開始当初の背景

縄文文化は変化を遂げつつ、1万年間継続した。この長期に続いた縄文文化の変化のリズムは、どのようなものだったのか。考古学者は従来、この種の問題をほとんど設定してこなかった。グリーンランドの氷床コアなどの記録データから、更新世終末(縄文時代草創期)の激しい気候変動以降にも、縄文時代に4回の寒冷期(ボンド・イベント:8.2ka、5.8ka、4.3ka、2.8ka)を含む気候変動があったことがわかってきた。本研究ではそれをふまえ、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期という6期区分を所与の条件とみなすような従来のやり方からはなれ、“構造(環境と人文・社会の関係性)変動”という視点から、縄文文化・縄文社会の安定期と変動期が気候変動(自然環境の変化)といかに関係していたのか、その実態解明をめざす。

日本考古学の学史を振り返ると、これまで、日本文化の基層としての縄文文化は、段階的発展という視点から捉えようとされてきた。岡本勇(1975『縄文社会の生産と呪術』岩波講座日本歴史1』岩波書店)は、緩やかな発展の累積のなかにも、歴史的な時期区分の指標として相応しい意味を担った段階が認められるとし、成立段階(草創期および早期)、発展段階(前期および中期)、成熟段階(中期末から晩期前半)、終末段階(晩期後半)の4段階を設定した。また、それぞれの上昇を基本的に導いたのは、労働用具とその技術の進歩、単位集団の増加による共同労働の発展など、生産力の着実な発達であると考えた。鈴木公雄(1984『日本の新石器時代』講座日本1』東京大学出版会)は、前半期と後半期という2期区分案を提唱している。前半期とされた前期前半までは、縄文文化の基本的骨格が形成された期間である。一方、後半期とされた前期後半～晩期は、集約的な獲得経済を発達させ、相対的に安定化した社会を形成し、特有の文化を発達させた期間である。小林達雄(1994『縄文土器の研究』小学館)は、イメージや「文化力」を重視し、縄文文化の本体に関わるとみる縄文土器自体の内容から、縄文時代を4時期、つまり「イメージの時代」(草創期)、「主体性確立の時期」(早期)、「発展の時期」(前期)、「応用の時期」(中期・後期・晩期)にわけた。

これらはいずれも、土器や石器、竪穴住居跡、貝塚、土偶、木製品、漆工芸、植物食料の加工技術など、文化要素の総体として文化を捉え、その種の遺物や遺構の多寡、規模、精粗を基準にした画期論である。その反面、米英におけるプロセス考古学の発達以降、認知システム、社会システム、経済システムなどのサブシステムからなるシステムとして、さらには生態系を構成するシステムとして文化を捉え、システムとしての文化や社会の安定と変化のプロセスを研究するための枠組みと、その方法論が形成されてきた。研究代表者による『人と社会の生態考古学』(安

斎 2007、柏書房)は、連携研究者の辻らが、三内丸山遺跡の古環境復元を通じて提唱してきた“生態系史”に通じるものである(辻 2006『三内丸山遺跡の生態系史研究:成果と展望』『植生史研究』特別第2号など)。

渡辺仁(1990『縄文式階層化社会』六興出版)の研究により、縄文時代が平等社会ではなく階層化社会であるという見方が普及してきた。英国のポストプロセス考古学が主張した、物質文化の読解から、人と社会の関係性を明らかにし、先史時代史を構成することも、考古学の大きな研究目的となっている。

以上のように理論・方法論を整備したのち、研究代表者はこれまで、縄文時代研究の実践に取り組んできた。平成15年度から5年間、連携研究者の高橋と共同で「縄文社会をめぐるシンポジウム」(景観と遺跡、縄文社会の変動を読み解く、などのテーマ)、平成19年度はおなじく連携研究者の佐藤と共同でシンポジウム「縄文文化の成立 草創期から早期へ」を開催し、そこでの議論をもとに研究成果を発表してきた。平成20年からは、東北芸術工科大学において、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」による『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究』の一環として、シンポジウムや研究会を開催してきた(平成20年度:「東北縄文前期社会における集落と生業」、「東北の原像 縄文と弥生・続縄文」、平成21年度:「北の貝の道、南の貝の道 貝製品のシンポジウム」、「東北縄文前期の集落と墓制」)。縄文社会が大きく変わった早期後葉～前期初頭、前期後葉、中期後葉～後期初頭、晩期中葉～弥生初頭の様相を解明してきた。また、東北各地での資料調査を通じ、これまで取り組んでこなかった時期・地域の様相について検討してきた。

一方、研究分担者の福田は、日露二国での調査結果にもとづき、これまで、環日本海北部地域の完新世文化動態を復元してきた。日本列島の縄文文化とロシア極東南部の新石器文化との比較研究のなかで、マクロレベルでの生態環境や気候変動、また、それらに伴う人文諸現象の相似性に着目してきた。他方で日本列島には、山岳地形がつくりだすミクロ生態系に由来した多様な地域社会の変遷が、日本列島では大陸側よりはっきりと認められる点にも注目してきた。平成19年度から、東北地方における縄文時代の地域性を具体的に調べる作業に取り組んできた。これにより、前期中葉～中期初頭に社会組織や生活構造の広域的变化が徐々に進んだこと、その変化が後の「縄文的」な繁栄に連なることがわかってきた。約5000年前の環日本海北部で、相似的な社会構造変動がほぼ同時におきた可能性も示唆された。

2. 研究の目的

旧石器時代から縄文時代にかけての縄文

化の過程が、晩氷期の激しい気候変動と密接に関連していたこと、そして、少なくとも東北日本においては、縄紋前期から中期への移行、および晩期から弥生時代前期への移行が急激な寒冷化と関連していたことを、すでに確認している。そこで本研究では、気候変化と文化変遷の年代対応を厳密化するとともに、早期から前期へと中期から後期への、二つの移行期における考古記録と環境変化の関係を解明する。そのため、自然環境復元とAMS法による炭素年代の精密化をはかる。

東北地方の縄紋前期にいたる変化が、大枠では北海道や沿海地方・アムール下流域と連動した動きであったこと、関東甲信越地域とも相関関係にあったことが、すでに示唆されている。それでは、前期以降の各時期はどうだったのか。東北北部を核とし、北海道、東北南部、関東甲信越、ロシア極東南部の地域性と相互関係について解明する必要がある。縄紋時代変動史を明らかにしようとする本研究は、新しい縄紋時代像の構築を目指す。

縄紋時代研究は、時期別、地域別、テーマ別に取り組みられるのが一般的である。本研究は、草創期から晩期まで約1万年間という長期的な展望での“縄紋文化の動態史”と、東北地方を中心にその南北に隣接する関東甲信越と北海道、対岸の沿海地方とアムール下流域を含めた広域を視野に入れた“縄紋生態系史”という二項的性格をもつ。研究代表者がこれまで取り組んできた“考古学のパラダイム転換”の実践である。

3. 研究の方法

本研究では、グローバルな気候変動と縄紋時代の変化、および地域的な生態系と縄紋文化の地域性との関連(主任:安斎、副主任:福田)、東北アジアの新石器文化と日本列島の縄紋文化との比較(主任:福田)、という二つのテーマを設定する。

テーマとテーマの各々で個別研究を進め、安斎が全体の監修・総括を行う。

縄紋時代の4回の寒冷期(8.2ka、5.8ka、4.3ka、2.8ka)を毎年選択し、その前後の社会構造変動を押さえつつ、研究を進めていく。各期に特化した議論を行う公開シンポジウムを毎年開催し、全国各地の発掘調査担当者達からの最新情報の提供、意見交換、討論を行う。各シンポジウムのテーマに関連する資料調査も並行する。東北縄紋遺跡の発掘調査を実施し、フィールドワークによる問題点の抽出と解決も行う。シンポジウムと遺跡調査という二側面から課題にアプローチする。

毎年度に実施するシンポジウムの企画・まとめは安斎、遺跡発掘調査と出土遺物等の整理・分析は福田、古環境復元・自然化学分析は辻と國木田が担当する。

4. 研究成果

(1)公開シンポジウム

「河川流域の縄紋景観」(平成22年度)

東北地方の主要河川流域における集落地等に関する最新情報の交換を行うシンポジウムを開催し、討論を行った。今後の研究方針についても議論した。

「縄紋時代早期を考える」(平成23年度)

8.2ka イベント前後にあたる早期の様相を解明するためのシンポジウムを開催し、アムール下流域・北海道・東北・関東・南九州の遺跡情報と、植生・植物利用史研究の情報を共有、問題点を整理することができた。

「東北地方における中期/後期移行期変動期」(平成24年度)

4.3ka イベントに関連して東北地方で起こった考古学的現象、資源利用の変化に関して議論するシンポジウムを開催し、情報の共有と問題点の整理を行った。最新調査研究成果が紹介され、近年の研究動向を捉えられた。

「関東甲信越地方における中期/後期変動期」(平成25年度)

4.3ka イベントに関連して関東甲信越地方で起こった考古学的現象、資源利用の変化に関して議論するシンポジウムを開催し、最新情報の共有と問題点の整理を行った。とくに土器型式の変化と環境変動の関係について、詳細な議論をすることができた。

「縄紋/弥生の画期」(平成25年度)

2.8ka イベントに関連して起こった考古学的現象、資源利用の変化に関して議論するシンポジウムを開催し、最新情報の共有と議論を行った。また、本研究最終総括研究会として位置づけ、研究の展望と課題を整理した。

(2)国内遺跡発掘調査

蕨山遺跡発掘調査(平成22年度)

酒田市飛鳥・蕨山遺跡の発掘調査を通して、縄紋前期末～中期初頭の東北地方日本海沿岸地域の環境適応、対外交渉の実態を捉えようとした。5.8ka イベントに関連するとみられる日本海沿岸域における社会変動の一端を具体的に捉えようとした。発掘調査では、集落縁辺部で縄紋中期前葉大木 7a~8a 式期の遺物包含層が検出された。出土遺物の分析や類型調査により、東北南部・東北北部・北陸における活発な交流関係、広域編年の解明に資する資料が得られた。また、飛鳥内における石材消費メカニズムの一端を解明した。

長畑遺跡発掘調査(平成23・24年度)

月布川流域中流域の大江町長畑遺跡の発掘調査を通して、縄紋晩期中葉(2.8ka イベント前)の東北地方南部山間地域における環境適応、生産消費行動、対外交渉の実態を捉えようとした。平成23年度に試掘調査を行い、縄紋晩期中葉大洞 C1 式期の遺構・遺物集中地点の存在を確認した。本調査を翌年行い、大洞 C1 式期の土器、剥片石器、石剣などが集積する遺構(第1号土器塚)が検出された。遺物、年代の考察を行い、東北地方中山間地における縄紋晩期の資源利用や交易交流のメカニズムの一部を復元できた。

(3) 論点

更新世終末～完新世初頭の気候変動のうち、約 16600 年前の「ハインリッヒ・イベント 1」の寒冷化を契機として、北海道の湧別技法（細石刃石器）をもつ集団の一部が本州に南下・移住しはじめる。この異文化集団と遭遇した中部高地の在地集団から「神子柴石器群」（「神子柴文化」）が発生した。約 14500 年前の急激な温暖化に伴い、この文化は変容・拡散した（草創期「隆起線紋・爪形紋土器段階」）。約 12900 年前から 1300 年間続いた「新ドリラス期」相当の寒冷期になると、再び遊動的居住形態に戻り、人口は減少していった（草創期「多縄紋土器段階」）。

約 11600 年前、気温が急激に上昇した。以後完新世となり、縄紋早期が開始する。「ボンド・イベント」とよばれる寒冷化現象が、1470 ± 500 年間隔で 8 回（約 11100 年前、10300 年前、9400 年前、8200 年前、5800 年前、4300 年前、2800 年前、1400 年前）起こった。それらの現象は、ロシア極東の新石器文化群を含めた環日本海北部地域・新石器文化群の盛衰に共通する重要な社会変動期となった。

早期の温暖期に、海面上昇（海進）がはじまる。海進への適応を象徴するかのよう、貝殻を施紋具とする土器が、日本列島各地に生じた。南九州では、貝殻沈線紋土器期の定住集落が、多数現れる。国分市上野原遺跡では、P13 火山灰降下（10600 年前）にからむ竪穴住居群と早期後葉の遺構群とが別々の地点で出土し、第 2・第 3 地点では竪穴住居 52 軒、連穴土坑 16 基、集石遺構 100 基、土坑 170 基と土坑群 2 ヶ所、道の跡 2 本が確認された。関東地方の燃系紋土器期では、町田市日影山遺跡で 23 軒、町田市多摩 No. 200 遺跡で 31 軒、府中市武蔵台遺跡で 32 軒の住居が検出された。（貝殻）沈線紋系土器期は、古東京湾の形成に伴い、沿岸集落の多くが水没したとみられる。東北北部沿岸地域でも、貝殻条痕紋土器の白浜式土器期に住居は増加したとみられるが、大集落はない。海進に伴い、沿岸部の集落は水没した可能性がある。一方、津軽海峡を挟んだ北海道側の中野 B 遺跡では、貝殻沈線紋土器の住吉町式土器期を中心とする約 2000 年間に形成された。竪穴住居 650 軒、土坑 392 基（墓壙・フラスコ状土坑など）焼土 19 ヶ所、集石 3 ヶ所がある。道東の帯広市八千代 A 遺跡では竪穴住居 103 軒が検出され、同じ台地上の北東に隣接する八千代 C 遺跡にも同時期の住居がある。この台地上では、さらに多くの住居が営まれていたものとみられる。

約 8200 年前をピークとする寒冷化（8.2ka イベント）の影響は、グローバルなものであった。南九州の寒気のピークは、塞ノ神式土器期の半ば頃である。だが、早期前葉に各地で営まれた定住集落は、早期中葉を経て姿を消す。この現象は先述の上野原遺跡第 10 地点に記録されており、竪穴住居はないが、遺物の希薄な空間を囲む「環状遺棄遺構」があ

る。ここからは、土偶、異形土製品、異形石器などが多数出土した。土器埋納遺構や石斧埋納遺構のある空間は「祭祀場」として機能したようだ。寒冷化に起因する社会的緊張下で、分散居住する集団間の精神的結束が要請されたといえる。8.2ka イベントから気候が回復し、再び温暖化にむかう早期終末（貝殻紋系塞ノ神式土器期）の良好な遺跡が佐賀県にある。遺跡は、縄紋海進最潮期直前の河口部に位置する。標高 3m 前後の微高地上で集石遺構 167 基と石器集積遺構 19 基が検出され、標高 0～-3m 前後からは貝塚 6 力所が見つかった。第 1、第 2 貝塚では、土坑 155 基、集石遺構 4 基、炉跡 3 基、配石遺構 3 基、木杭約 500 本が検出された。貝層は約 7900 年前から 200 年間堆積し、海水準は標高約 -4.5m から約 -3m まで約 1.5m 上昇した。九州では、アカホヤ火山の大爆発（約 7300 年前）の影響で、前期文化の発展が阻害された。

早期後半の関東地方では、特徴的な炉穴が急増する。竪穴住居は野島式土器期まで、主柱穴が不明確であるが、時期が下り 4 本柱の例が増える。茅山上層式土器期以降に、定形的な方形・長方形の住居が多くなる。これも、鵜ヶ島台式土器期をピークとする 8.2ka イベントに原因があり、回復期の茅山下層・上層式土器期以降、定住集落はまた急増する。船橋市飛ノ台貝塚は、縄紋海進の一時的な停滞、または海況の安定した時期に形成・維持され、その後海進が再開し、集団は移動した。気候が回復し、海面上昇が再開したときに形成されたのが、市原市天神台遺跡である。竪穴住居 17 軒、竪穴状遺構 13 基、炉穴 248 基、集石 4 基、陥穴 38 基、土坑 117 基、落ち込み 3 基、竪穴住居・炉穴覆土内の貝ブロック 58 ヶ所がある。集落は、楕円形（長軸 240m）の範囲内にある。長台形大型住居 10 基が、南側の限られた地点に分布する。遺構出土土器は、鵜ヶ島台式・茅山下層式・茅山上層式が混在するが、主体は茅山下層式である。大型住居の集中地区では、茅山上層式がやや多い。富士見市打越遺跡では、気候が回復し海進が再進行した時期の集落変遷の様相を見て取れる。海進期の古入間湾に臨む貝塚遺跡である。竪穴住居は早期末 58 軒、前期 101 軒（花積下層式期 41 軒、関山式期 56 軒、黒浜式期 6 軒）である。早期末葉～前期前葉の住居が多く、花積下層式期～関山式期に集住する。

東北地方北部では暦年較正年代がなく、8.2ka イベント相当期の土器型式は判然としない。早期末～前期初頭の考古記録も不十分であるため、今後検討していく必要がある。

北海道では浦幌式土器が石刃鍬石器群と伴出した大正 3 遺跡の年代が 8.2ka イベント相当である。アムール下流域・サハリンの並行期の石器・土器群の変化もこのタイミングと連動している。石刃鍬石器群の道東から道央南への拡散は、寒気のピークを迎えて従来の生業圏では人口を維持できなくなり、小集団ごとくに南へ移動した結果だと考える。縄紋

平底土器（東釧路系土器）期が気候の回復期に相当し、道東でも東釧路式～中茶路式土器期以降、住居数が増加し、石鏃とつまみ付ナイフの副葬が注目される。道央の美沢1遺跡では、コッタロ式土器期の竪穴住居跡8軒が検出された。つまみ付ナイフ2点を副葬した土壌墓がある。美沢2遺跡では、同時期の竪穴住居が33軒検出された。次の東釧路式土器期は、竪穴住居11軒、土壌墓1基、土坑7基がある。墓には足形付土版2点が副葬された。早期末葉の東釧路式土器を残した集団は、乳幼児の足形が付いた土版を墓に副葬した。それ以外に、尖頭器類、つまみ付ナイフ、抉り入り剝片、石斧類も副葬された。尖頭器類とつまみ付ナイフは特徴的である。土製品と葬礼は「重要人物（権威者）の死」と、その継承者の政治的プロパガンダに強く関わったと考えられる。これは、前期網紋土器期に受け継がれる。「特異なつまみ付ナイフ」（「北斗型石小刀」）と過剰デザインの石槍の副葬から、網文式土器文化とよべる一つの共通基盤をもつ文化伝統が、その背後にあったとみられる。石器の象徴性については、前期前半に複数の石鏃を副葬した土壌墓が知られている。

前期後半（円筒下層式土器期）の北海道でこの葬制は見られなくなるが、津軽地方を中心とした東北北部の円筒下層式土器とくに円筒下層c式・d1式土器期に、多数の石鏃、過剰デザインの尖頭器・異形デザインの尖頭器、石匙（つまみ付ナイフ）、精製の石斧などが副葬されるようになる。8.2ka イベントにより生じた社会的不安な時期に顕現した退役狩猟者（首長）層の顕彰のため、一時的に出現した葬制であると解釈される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計14件）

安齋 正人、考古学史の方法、東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要、査読無、第13号、2014、107-122

福田 正宏、サハリン・アムール流域、北海道考古学会、北海道考古学、査読有、第50輯、2014、137-150

安齋 正人、縄文時代早期論（下）、東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要、査読無、第12号、2013、3-31

福田 正宏、北海道とサハリン・千島、季刊考古学、査読無、第125号、2013、62-65

國木田 大、近年の考古学における¹⁴C年代研究、月刊地球、査読無、第408号、2013、529-536

佐藤 由紀夫、北海道・道南地域における縄文時代晩期後半から続縄文時代前半の磨製石斧の様相、みずほ別冊、査読無、2013、1-22

安齋 正人、縄文時代早期論（中）、東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要、査読無、第11号、2012、3-29

福田 正宏、阿子島 香、國木田 大、吉田 邦夫、宗仁式土器の再検討、Bulletin of the Tohoku University Museum、査読有、第11号、2012、201-208、<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/handle/10097/54420>

國木田 大、遺跡における層序の年代決定、考古学ジャーナル、査読無、第632号、2012、15-19

佐藤 由紀夫、東北北部出土の弥生系磨製石斧について、初、査読無、第8号、2012、15-54

安齋 正人、縄文前期人のたたかい、うきたむ考古、査読無、第15号、2011、1-30

安齋 正人、縄文時代早期論（上）、東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要、査読無、第10号、2011、3-36

佐々木 史郎、田口 洋美、福田 正宏、極東ロシアと東北地方との相対研究の可能性、

まんたら、査読無、第48号、2011、12-16

福田 正宏、新石器、考古学ジャーナル、

査読無、第605号、2010、10-13

〔学会発表〕（計14件）

高橋 龍三郎、総括コメント、シンポジウム・関東甲信越地方における中期／後期変動期：4.3ka イベントに関する考古学現象、早稲田大学、2013.4.27

安齋 正人、完新世の気候変動と縄文文化の変化、シンポジウム・関東甲信越地方における中期／後期変動期：4.3ka イベントに関する考古学現象、早稲田大学、2013.4.27

西村 広経、福田 正宏、大澤 正吾、林 正之、垣内 彰悟、安室 一、高鹿 哲大、中門 亮太、富樫 那美、安齋 正人、山形県大江町長畑遺跡の調査、第14回北アジア調査研究報告会、石川県立歴史博物館、2013.2.9

國木田 大、三十稲場式土器の年代と食性分析、三十稲場式土器文化の世界、津南町、2012.10.13

菅野 智則、宮城県における縄文中期から後期にかけての様相、シンポジウム・東北地方における中期／後期変動期：4.3ka イベントに関する考古学現象、東北芸術工科大学、2012.7.15

國木田 大、縄文時代中・後期の環境変動とトチノキ利用の変遷、シンポジウム・東北地方における中期／後期変動期：4.3ka イベントに関する考古学現象、東北芸術工科大学、2012.7.15

佐藤 宏之、Shevkomud、大貫 静夫、森先 一貴、福田 正宏、熊木 俊朗、國木田 大、他8名、アムール下流域コンドン1遺跡の調査、日本考古学協会第78回総会発表、立正大学、2012.5.27

安齋 正人、縄文時代早期の構造変動、シンポジウム・縄文時代早期を考える、東北芸術工科大学、2011.12.17

福田 正宏、アムール下流域における考古学研究最前線、シンポジウム・縄文時代早期を考える、東北芸術工科大学、2011.12.17

北野 博司、宮内 信雄、滝沢 規朗、胴下部コゲの形成過程からみた縄文深鍋によ

る調理方法、日本考古学協会第 77 回総会
研究発表、國學院大學、2011.5.29
福田 正宏、Shevkomud、熊木 俊朗、國木
田 大、内田 和典、森先 一貴、Gorshkov、
Kositsyna、Bochkareva、吉田 邦夫、佐藤
宏之、大貫 静夫、アムール河口域の考古
学的調査、第 12 回北アジア調査研究報告
会、札幌学院大学、2011.3.6
福田 正宏、飛鳥蕨山遺跡にみる日本海文化交
流、さーべい考古学研究会、遊学館、2011.2.6
菅野 智則、北上川流域の縄文集落遺跡、
シンポジウム・河川流域の縄紋景観、東北
芸術工科大学、2010.10.31
辻 誠一郎、東北地方の完新世流域生態系
史、シンポジウム・河川流域の縄紋景観、
東北芸術工科大学、2010.10.30

〔図書〕(計 10 件)

安齋 正人、福田 正宏 編、『完新世の気候
変動と縄紋文化の変化』研究グループ、完
新世の気候変動と縄紋文化の変化: 研究成
果報告書、2014、180
安齋 正人 監修、公開シンポジウム『関東
甲信越地方における中期 / 後期変動期：
4.3ka イベントに関する考古学現象』実
行委員会、関東甲信越地方における中期 /
後期変動期：4.3ka イベントに関する考古
学現象・予稿集、2013、91
佐藤 宏之 他、岩波書店、岩波講座 日本
歴史第 1 巻、原始・古代 1、2013、29-62
熊木 俊朗 他、青木書店、講座日本の考古
学 3、縄文時代(上)、2013、601-625
安齋 正人、同成社、気候変動の考古学、
2012、188
安齋 正人 監修、公開シンポジウム『東北
地方における中期 / 後期変動期：4.3ka イ
ベントに関する考古学現象』実行委員会、
東北地方における中期 / 後期変動期：
4.3ka イベントに関する考古学現象・予
稿集、2012、94
福田 正宏、安齋 正人 他、東北芸術工科
大学、月布川流域における縄文時代遺跡の
研究 1 山形県西村山郡大江町長畑遺跡
第 1 次範囲確認調査概要報告、2012、45
安齋 正人、福田 正宏 編、公開シンポジ
ウム『縄紋時代早期を考える』実行委員会、
縄紋時代早期を考える・予稿集、2011、70
安齋 正人 監修、福田 正宏 編、公開シンポ
ジウム『河川流域の縄紋景観』実行委員会、
河川流域の縄紋景観・予稿集、2010、90
福田 正宏 他、東北芸術工科大学、飛鳥に
おける考古学的調査 山形県酒田市飛鳥
蕨山遺跡範囲確認調査報告書、2010、76

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安齋 正人 (ANZAI, Masahito)
東北芸術工科大学・東北文化研究センタ
ー・教授
研究者番号：60114360

(2) 研究分担者

福田 正宏 (FUKUDA, Masahiro)
東京大学・新領域創成科学研究科・准教授
研究者番号：20431877

國木田 大 (KUNIKITA, Dai)
東京大学・人文社会系研究科・助教
研究者番号：20282543

(3) 連携研究者

辻 誠一郎 (TSUJI, Seiichiro)
東京大学・新領域創成科学研究科・教授
研究者番号：20137186

高橋 龍三郎 (TAKAHASHI, Ryuzaburo)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80163301

佐藤 宏之 (SATO, Hiroyuki)
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：50292743

佐藤 由紀夫 (SATO, Yukio)
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：00552613

北野 博司 (KITANO, Hiroshi)
東北芸術工科大学・芸術学部・准教授
研究者番号：20326755

熊木 俊朗 (KUMAKI, Toshiaki)
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号：20282543

蛭原 一平 (EBIHARA, Ippei)
東北芸術工科大学・東北文化研究センタ
ー・講師
研究者番号：40589371

菅野 智則 (KANNO, Tomonori)
東北大学・埋蔵文化財調査室・専門調査員
研究者番号：30400196